

プロフィール



谷富 愛美

TANITOMI, Manami

熊本県出身。7歳より生田流箏曲を上迫田日呂子、10歳より吉崎克彦の各師に師事。また、地歌三絃を両師に師事。第2回全国邦楽ジュニアコンクール第1位、熊本県高等学校器楽コンクール3年連続金賞、その他数々の受賞を経て2007年に熊本県高校生文化功労賞を受賞。2008年より洗足学園音楽大学にて箏・十七絃を石垣清美、三絃を西潟昭子、玉木陽子の各師に師事。2011年、第18回賢順記念全国箏曲コンクールにて奨励賞を受賞。2012年、卒業時に学内にて優秀賞を受賞し、現代邦楽コースを主席で卒業。第9回新人演奏会に出演。現在、同大学大学院在学中。宮城社教師。宮城会、熊本箏協会、TOKIO KOTO派に所属。



古川原 裕仁

FURUGAWARA, Hirohito

国立音楽大学卒業。1978年在学中に、新日本フィルハーモニー交響楽団に入団。1989年、渡米し川崎雅夫氏のもとで研鑽を積む。帰国後、1992年、新日本フィルを退団し、フリー奏者として活動。1994年には東京ヴィヴァルディ合唱団・第71回定期演奏会でソリストとして同団と共演、続く第72回定期演奏会では、ヴィヴァルディ作曲のヴィオラダモーレ協奏曲を日本初演。これまでに、新日本フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、東京フィル、東京シティフィル、新星日本交響楽団、ニューフィル千葉、神奈川フィル、静岡交響楽団、京都市交響楽団、大阪フィル、九州交響楽団、などの客演首席をつとめている。ヴィオラを、深井硯章、ウルリッヒ・コッホ、白尾偕子、川崎雅夫、竹内晴夫の各氏に師事。現在、ヴィルトーゾ横浜(弦楽合奏団)ヴィオラ奏者、横浜音楽文化協会会員、日本弦楽指導者協会会員、洗足学園音楽大学講師。



山口 賢治

YAMAGUCHI, Kenji

尺八を青木鈴慕(人間国宝)、佐々木晴風、演奏法を石川憲弘の各師に師事。第39期NHK邦楽技能者育成会卒、現代邦楽研究所研究科卒。NHK邦楽オーディション合格。書籍「和楽器にチャレンジ尺八を吹いてみよう」(汐文社)、CD「尺八の現在革新から新たな伝統へ」(YSEK001)。現在、山口尺八演奏研究室主宰、邦楽創造集団オーラJ団員。洗足学園音楽大学伝統音楽デジタルライブラリーにて演奏を配信。

URL http://www.senzoku-online.jp/traditional/03_shaku8.html



洗足学園音楽大学

【主催】洗足学園音楽大学・大学院 【後援】「音楽のまち・かわさき」推進協議会



和楽器コンサート

谷富愛美 箏と十七絃の世界

2013年3月2日(土)

14:00開演 [13:30開場]

洗足学園音楽大学 講堂



洗足学園音楽大学

曲目

カプリッチオ／牧野 由多可 作曲

I 箏 谷富 愛美 (院1) 丸山 瑠美 (学4)
II 箏 大友 美由奈 (学4) 坂本 知亜子 (学3)
III 箏 産形 典子 (卒)
十七絃 五十嵐 恵 (卒) 西 琴美 (卒)
尺八 山口 賢治 (講師)

哀歌-沈める瞳-／吉崎 克彦 作曲

ヴィオラ 古川原 裕仁 (講師)
十七絃 谷富 愛美

鳥のように／沢井 忠夫 作曲

箏独奏 谷富 愛美

越後獅子／峯崎 勾当 作曲

唄・箏 谷富 愛美
三絃 大友 美由奈
尺八 山口 賢治

箏協奏曲 翔／石井 由希子 作曲【委嘱初演】

独奏箏 谷富 愛美
箏1 産形 典子 坂本 知亜子
箏2 西 琴美 丸山 瑠美
十七絃 五十嵐 恵
三絃1 大友 美由奈
三絃2 稲沢 茉莉 (学3)

曲目解説

カプリッチオ／牧野 由多可 作曲

1973年に若い箏奏者の集まりである桐韻会というグループからの委嘱で作曲されました。カプリッチオとは快活でユーモアな楽曲という意味で、題名からも想像されるように、現代曲にありがちな肩肘張った厳めしさや直接的な表現をあえて省いたような陶酔さを持たない明るい曲想になっています。これは若い人たちからの委嘱ということが作曲者の心を開かせ、楽しみながら作曲したためであろうと思われます。曲は組曲風に3つの楽章に分かれていて、1楽章と2楽章は続けて演奏されますが、終楽章のみ独立して演奏されます。全体にラプソディックで、各パートの独奏部分と合奏部分との対比は、協奏曲のような趣があります。

哀歌-沈める瞳-／吉崎 克彦 作曲

この曲は、もともと尺八と十七絃との2重奏曲として1988年に作曲されました。情感に満ちた十七絃から始まり、徐々に思いを募らせ、後半はダイナミックに盛り上がる曲想は吉崎克彦作品に共通した魅力です。今回はヴィオラとの2重奏で演奏します。

「人は常に何かを追い求めて旅する……。十七絃の持つ切々たる響きは、いつも私を哀しみの音へと旅立たせてしまう。哀しみのテーマは私の心の中で広がり、哀しみから悲しみの音へと旅立って行く。低音の哀しく重い響きから、高音の嘆きにも似た音へと追い求めて行く時、不思議に遠くイスラムの世界に広がる砂漠の真直中で見る曇気楼を夢想してしまう。それは余りにも不毛なるがゆえの幻想的哀歌なのかも知れない。沈める瞳に、人は不毛の哀歌を感じる……。」

[吉崎 克彦]

鳥のように／沢井 忠夫 作曲

生田流の名演奏家として知られた沢井忠夫(1937-97)による代表作品で、1985年1月に作曲されました。沢井忠夫は、若手演奏家や指導者の育成のために沢井箏曲院を設立したり、ヨーロッパやアメリカ、アジアなどで幅広く海外演奏を展開したりと、箏の魅力を伝えるために尽力しました。現在、沢井忠夫の作品は、流派を越えて多くの演奏家に演奏されています。

「鳥のように大空を翔けることが出来たら、という夢は誰しも持っていて、ライト兄弟が飛行機を発明したのもその夢に取り付かれたからでもある。そのお陰で人々は現在地球上の何処へでも自由に飛んで行くことが出来る。しかし日常において、ふいに時間に迫られた時、また逆に心がふくらむような素晴らしい出来事のなかであって空を仰いだ時、雲に憧れた時、そんな時にはやはり鳥のように空を翔けてみたい。」

[沢井 忠夫]

越後獅子／峯崎 勾当 作曲

越後獅子という曲は、現在は長唄が最もよく知られていますが、原曲は地歌とされています。お正月になると、越後から少年の団が、派手な衣装をして、時には赤い獅子頭を持って都市を巡りました。越後獅子とはその少年たち角兵衛獅子のことで、彼らの曲芸は正月の大道芸の花形でした。この曲はそんな越後の名所や産物を歌詞に散りばめて描かれたもので、全体として一貫の意味があるわけではありませんが、当時の風俗を面白く掛け合っていて祝い目たく締めくくる内容となっています。

【歌詞】

越路湯 御国名物さまざまなれど 田舎なまりの片言交り 白うさぎなる言の葉に 面白がられしそな事を 直江浦の海士の子が 七つか八つ目鰻まで うむや編その綱手とは 恋の心も米山の とほき浮気で黄蓮も なに糸魚川糸魚の 纏れ縛つる草浦の 油漆と交りて 末松山の白布の 縮は肌の何処やらが 見え透く国の風流を うつつ大鼓や笛の音も 弾いて唄ふや獅子の曲 向ひ小山のしち竹 枝節揃えて 切りを細に十七が 室の小口に昼寝して 花の盛を夢に見て候 夢の占象越後の獅子は 牡丹は持たねど富貴は 己が姿に咲かせ舞ひ納む 姿に咲せて舞ひ納む

箏協奏曲 翔／石井 由希子 作曲【委嘱初演】

2013年、洗足学園音楽大学<和楽器コンサート～谷富愛美 箏と十七絃の世界～演奏会>委嘱作品。「3月の演奏会のための新作を」との依頼をいただき、3月といえば、旅立ち～新たなる出発への希望に満ちて～という季節であると思い、夢の翼を広げて大空へ羽ばたいてほしい、という願いを込めて「翔」というタイトルとし、音を綴りました。曲は全体を通して、箏のトレモロが様々な心の機微を表すかのように印象的にさざめきます。短い序章の後、生き生きと青春を謳歌するように曲は始まり、中間部では疲れた羽を休めて癒されるように、箏群のトレモロに支えられながら独奏箏が叙情的に奏でます。独奏箏のカデンツァの後、大合奏での大空への豊かな飛翔となり、未来への希望を祈りつつ曲を終わります。

[石井 由希子]